

書名：博士の愛した数式

著者：小川洋子

出版社：新潮社

出版年月：2003年8月

総ページ数：253ページ

ISBN：410401303X



推薦者

佐伯昭彦

鳴門教育大学大学院准教授
自然系コース（数学）

皆さんはこの書名「博士の愛した数式」から感じる第一印象は何ですか？

書名にある「博士」とは、数学者のことであり、数学の難題に日々取り組んでいる気難しい感じの主人公が想像されますね。さらに「数式」から、数学が苦手な人にとっては、ジンマシンが出るくらいなら読む価値はないと思うかも知れません。

この本は、第一回本屋大賞と第一回日本数学会出版賞を受賞した作品です。作家の小川洋子さんは、学生時代は数学を苦手としていたそうですが、ふとしたきっかけから数学の美しさに惹かれ、数学者を主人公とした小説を書いたとのこと。

主人公は、17年前に交通事故にあって、それ以前の記憶はあるけど、それ以降の記憶は80分しか持続しない年老いた数学者。そのため、老数学者の備忘録としてのメモが身体中に貼られているといった、とても風変わりな人物であります。そして、その老数学者の家に派遣された家政婦である「私」とその10歳の息子、これら3人に関わる愛情物語です。さらに、老数学者が大好きな元阪神タイガースの江夏豊投手の背番号28がこの物語の重要なエッセンスとなる奇想天外な展開がとても魅力的です。

記憶が80分しか持続しない老数学者にとっては、記憶が途切れた後の家政婦との出会いは、常に初対面となります。その挨拶は、誕生日や靴のサイズなど、数字に関する老数学者の質問が繰り返し行われます。例えば、誕生日の質問では、家政婦の誕生日の2月20日である220と、老数学者が大学時代の論文で受賞した学長賞の時計の裏に刻まれた番号284が友愛数⁽¹⁾であることが分かり、家政婦は数学の美しさに興味を抱くとともに、二人の関係が数学を通して徐々に深まっていきます。

この本では、素数、双子素数、約数、完全数、三角数、階乗、オイラーの定理などの数学が登場し、作者は具体的な事例をもとに、とても素晴らしい文章で表現していますので、数学の美しさをより際立たせています。また、家政婦と息子が数学の問題を解いているときの老数学者の接し方は、数学の定理や解き方を一方的に示すのではなく、二人の考え方を最大限に尊重しながら、結果が出るまで辛抱強く待つといった、教師にとって大切な姿勢が随所に見受けられます。将来、教員を目指す皆さんに是非とも一読して欲しい作品の一つです。

(1) 220の自分以外の約数(1, 2, 4, 5, 10, 11, 20, 22, 44, 55, 110)を全部足すと284になり、284の自分以外の約数(1, 2, 4, 71, 142)を全部足すと220になる。このような組み合わせを「友愛数」といい、滅多に存在しない組み合わせである。